「主の言葉はその口に」
列王記上 17 章 17－24 節

エリヤがアハブ王に干ばつを預言した後、3 年の間、雨が降らなくなりました。アハブ王は、この飢饉の原因はエリヤにあるとしてエリヤの命を狙います。この間、エリヤはシドンのサレプタに住む 1 人のやもめの家にかくまわれることになります。けれども、ある日、彼女の息子が病死してしまったのです。それまで、神さまによって助けられた毎日を送れていた時は、「あぁ神さまって素晴らしい」で良かったのですけど、このような「なぜ」って思わされるような出来事に出くわされる時、私たちの信仰は試されます。

では、息子が病気になって弱っていく中で、このやもめの女性はどうしていたでしょうか？当然、エリヤに助けてくださいって願ったと思います。そして、エリヤも、神さまに癒しを祈り求めたのではないでしょうか。ところが、その祈りもむなしく、息子は死んでしまったのです。この女性の深い悲しみはどれほどだったでしょうか。

彼女はエリヤに言います。「あなたはわたしにどんなかかわりがあるのですか」って。「あんたが変に関わってきたから、息子が死んでしまったのよ。私に何の恨みがあるのよ」とでも言いたげです。この女性は、この怒りをエリヤにぶつけました。しかし、このつぶやきは、エリヤに対するものであると同時に、エリヤを遣わされた神さまに対してのつぶやきでもあります。大きな試練に向き合わされる中で、この女性は、まことの神を見失い、神さまに不平不満をぶつける存在になってしまったのです。

やもめの息子の死は、エリヤにとっても大きな試練の時でした。病気の息子のために神さまに執り成し、一生懸命祈ってきたはずです。でも息子は死んでしまった。この時エリヤは、預言者としての敗北感を味わったのではないかと思います。もしかすると、敗北感だけではなく、神に対する信頼さえも揺らいだかもしれません。少なくとも心の葛藤というものはあっただろうと私は思います。

この時のエリヤは神さまに納得していません。ただ、ここから読み取れるエリヤの信仰があります。エリヤは、神様が死んだ人間だろうと生き返らせることができると信じているということです。聖書には死者が生き返るという奇跡が 7 つ記されていますが、その最初の奇跡がこの時です。つまり、それまでそんな出来事はなかったのです。でも、エリヤは「神さまならばそんな力も持っておられる。神にできないことは何もない」、そう信じればこそ、必死に息子の生き返りを祈っているのです。そして何度も祈ったのです。

神さまは、エリヤのこの必死の祈りを待っておられたのではないでしょうか。そのためにエリヤに試練を与え、その信仰を試されたのだと思います。もし、仮にこの息子が死なずに病が癒されていたら、エリヤからこの必死の祈りは出てこなかったと思います。ある種の敗北感を味わったからこそ、この祈りが引き出されたのです。

ヤコブの手紙にはこう記されています。「わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全で申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります。」（ヤコブ 1：2－4）

苦難を通して、私たちの信仰は練られていきます。そして、試練の中に置かれた時に求

められることは、神さまが必ず助け出してくださると信じて、ときには、なりふり構わずに神さまに対して、祈りもがくことです。本気の祈り、必死の叫びを愛する子どもがしている時に、天の父なる神さまは放っておかれるでしょうか。決してそんなことはありません。具体的な解決は、神様のお考えの中で、神様の時に適って与えられていくものですから、私たちの願い通りにはならないかもしれません。でも、必死に神さまに求める中で、状況は変わらずとも平安が与えられる、そういうことは起こり得ることです。そういう体験を通して、私たちは神さまを信じる心が深められていくのです。

　このエリヤの祈りに神様は応えてくださいました。エリヤの味わった感動と神さまへの感謝、そして死人を生き返らせた神への畏れは、どれほどのものであったことでしょうか。おそらく、すぐに息子が生き返っていたら味わえない体験を与えられ、神さまへの信頼がより硬いものとなったことでしょう。そして、エリヤは生き返った息子を連れて部屋から降りていきます。そして母親に向かって言いました。「見なさい。あなたの息子は生きている」と。
　やもめの女性は、生き返った息子を見てどんな気持ちだったでしょう。もちろん息子が生き返ったという溢れる喜びがあったでしょう。しかしそれ以上に、死んだ人間を生き返らせたイスラエルの神さまに対する畏れを抱いたのではないでしょうか。そして神さまやエリヤに対して不満をぶつけた不信仰を恥じたことでしょう。そして、そういう中で彼女は信仰を育まれ、最後にこのように告白します。「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です」と。

　この女性は、何によって、このような信仰の告白に導かれたのでしょうか。それは、エリヤの必死に祈る姿によってでした。主を証しするというのは、みんながみんな聖書を語ったり、人前で自分の身に起こった霊的体験を話したりすることだけではありません。もちろん、それも大事なことです。でも、それだけがすべてではありません。祈ることも礼拝することも、また神さまに感謝して生きる私たちの生活も、そのすべてが証しです。そして、そのような私たちの信仰の姿を通して、「あなたの口にある主の言葉は真実です」と、そう主を告白する者が起こされますよう、私たちを通して神さまご自身の御業が現わされますよう、どうか神さまが私たちの信仰を強めて用いてくださいますようにと、そのように願ってまいりたいと思います。